

海外の医療制度から広がった視点
公衆衛生看護学実践コース1年 26S1060 西野茉莉

新生児ホスピスについての話が特に印象的だった。最後まで両親に自分の子どもを抱かせてあげることができない状況があることを知り、考えさせられた。保育器から出てしまうと命に関わることは誰でも理解できるが、海外ではあえて保育器を外し、家族と最期の時間を過ごせる環境が整えられていることを知った。日本では成人のホスピスは耳にするが、新生児ホスピスについてはこれまで考えたこともなく、新たな視点を獲得することができた。また、他の授業で海外の緩和ケアでは患者の負担を減らすために、モニター管理やバイタルサイン測定を行わない場合があることを学んだ。

私は看護師として勤務していた際、バイタルサインや尿量などから患者の状態をアセスメントし、家族支援につなげることを行っていた。しかし、バイタル測定も患者にとっては侵襲となり得るという視点は持っていなかった。実際に、布団をめくられることで寒さを感じたり、血圧測定で腕が締め付けられたりすることは患者の負担になる。

振り返ると、私は一連の業務として看護を行っていた部分もあったのではないかと考えさせられた。海外のホスピスの考え方から、医療行為を行うだけでなく、見守ることも看護の一つであると学んだ。

日本では当たり前で使用されている母子手帳についても改めてその重要性を感じた。子どもの成長や予防接種の記録を確認できることは大切であり、どのワクチンを接種したのかわからない状況があることには驚いた。母子手帳の導入支援は、子どもの健康管理だけでなく、新生児死亡率の低下にもつながっていると考える。海外の医療には日本より進んでいる部分もあれば、発展途上の部分もあることを知った。自分の知識や視点を広げることが、将来住民と関わる際にも役立つと思う。

自分の市のホームページを見た際には、SNSでの発信や市長の地域活動への参加が少なく感じられ、他自治体との違いについても考える機会となった。

今回の講義を通して、自分の知らない考え方や価値観に触れることの大切さを実感した。海外へ行くことは難しくても、実際に経験した人の話を聞くことで視野を広げることができる。今後もさまざまな人の経験や考え方に触れながら、自分自身の知識や視点を広げていきたい。